

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	林育生			
論文題目	Yiguan Dao in Thailand: A New Religious Organization in Contemporary Thai Buddhist World (タイにおける一貫道 ー現代タイ仏教世界における新宗教団体ー)					
(論文内容の要旨)						
本論文は、現代タイ国における中国・台湾系新宗教である一貫道の民族誌である。中国から台湾を経て伝えられた一貫道は、現在では華僑華人のみに限らずタイ人信者をも多く獲得している点が特徴である。本論文ではこの一貫道の、民族境界を越えた急成長を、信者たちの社会的ネットワークに着目して分析している。 第一章は序論であり、本論文の問題意識と理論的立場が述べられている。東南アジアにおける一貫道はこれまで、主に中国宗教研究の射程の中であつかわれ、東南アジアの華僑華人における中国的伝統の保持や復興という図式の中で論じられる傾向にあった。本論文ではそれに代え、タイ国の新宗教のひとつとして一貫道をとらえなおす立場を提唱する。 第二章では、一貫道の成立とタイ国への導入が論じられる。タイ国における一貫道は、20世紀後半以降に急速に信者を拡大している。そこでの特徴は、信者を華僑華人のみならず土着タイ人の間からも獲得していることである。このことは、単純な中国宗教論や華僑華人アプローチでは一貫道の動態をとらえきれないこと、むしろそれはタイ国における近代化の進展とのかかわりにおいて把握すべきであることを示している。 第三章では、一貫道と既存のタイ仏教との間で生じている論争やトラブルがとりあげられる。タイ国における中国系宗教は、広義の仏教の一環として受け入れられ、そのため既存の仏教教団と大きな摩擦を生むことなく共存してきたとこれまでの先行研究では述べられてきた。そうした見解が一面的であることを、一貫道の事例は示している。一貫道とタイ仏教との関係は、むしろ主流宗教に対して新宗教として独自性を打ち出そうとしていることに規定されており、またそうしたタイ仏教との競合的な関係のなかで、一貫道が自らのアイデンティティを模索していることがそこでは明らかになる。 第四章では、一貫道の組織構造における特徴が論じられる。中国本土で当初は非合法団体として活動を開始した一貫道は、そうした背景から非常に複雑かつ細分化された分派が構成され、組線と呼ばれる分派ごとに傘下の仏堂や信者の動員が行われている。そのため信者たちは、教団活動への参加や教団内での位階の昇進にあたっては、タイ全国に複雑に張り巡らされた組線のネットワークに沿って頻繁に移動することが						

義務づけられることになる。これは近代化・産業化の進展にともない移動性が高まっているタイ社会の現状にうまく適合しているだけでなく、そうした一貫道のネットワークそのものが、未知の土地に赴く人々に対しての疑似的なコミュニティとして機能している。また一貫道の教義の中には、教線拡大への貢献の重要性が組み込まれており、未知の土地での他者とのかかわりが積徳行為として義務づけられていることが、さらにそうした傾向を補強している。

第五章では、一貫道の信者に女性が多くみられる点に着目し、一貫道の組織における女性の地位についての考察が行われる。一貫道は中国の伝統的徳目の復興という主張をその教義の中に含んでおり、そのかぎりではきわめて保守的な傾向をもつ。にもかかわらず、その支持者の多くが女性である。これは、見かけ上の保守性にもかかわらず、実際の組織の運用面では一貫道が女性信者により多くの機会を提供するという事実を反映している。それは教団内での女性の昇進機会の保証や、移動性の高い組織構造の中で女性信者に与えられる、家庭や出身地を離れた場所での活躍機会の提供などである。こうした点が、タイ国の宗教市場におけるタイ仏教との競合の中で、一貫道が女性を中心に支持者を拡大している要因となっている。

終章（第六章）では、以上の考察をふまえ、一貫道の視点からのタイ宗教論が展開される。従来のタイ宗教論では、近代化に伴い既存の僧院組織が正統性を弱め、それに飽き足らない個人が、自己の欲望を満足させるために特定のカリスマ僧崇拝や護符崇拝に傾斜するという図式が幅広く受け入れられてきた。それに対し一貫道の事例が示しているのは、伝統的仏教教団の外部で生じているさまざまな新宗教運動が、必ずしも伝統的教団からの個の開放というかたちでとらえられないということである。一貫道の全国に張り巡らされた組線のネットワークや教線拡大の教義は、移動性の高い現代社会の中で、なおかつ移動性とコミュニティとを両立させる試みとしてとらえるのである。